

溫故新集

酌古

AF
JAP
299
1

酌の次



一 社殿へ盃出候の事 客人因事此時分客人の
方へきて坐ししを以て乃方ハ勿偏の事
客人トモなるを以て乃方ハ客臣に類ハ
當殿ト稱せられ同く見合座し
一 社子扱ふの事 殿と坐右と坐し社に
所即し之を以てたふし其日の下とた

21942

Handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page.

抑何道少之云此弱き方一物多也

卷之六

予之於此
 氣之行要
 何處為居
 哉

一 加へるに左へつゝより提斗内へ入る

一 加の事は酌より上りとも説き口傳

一 酌の足らず初然之男二然三男之然月不端の聲

を起し能く得る一層

一 酌盡る極のとき多飲の御名は池をまゐりて

おふちと云へ一下や此時池をわくくし

めく池し同又さくもの池をわくくし

小角中より飛出れば又おまじし又人小易に

おまじとおまじし同くこれ池をわくくし

おまじ池をわくくし下り上り上り上り

池より池よりさくおまじ同く一層

おまじ上中下たふ池などおまじ池を

おまじ

一 御前より酒番御の事申せたりと

一 小角とれたあゝと盡とれた小角と大のふに
重なり実際なる乃裁て下とて吾也め
酌ふ向酒と清又光人の出さ向ひ中々燃し
隙と隙とさうつあきさうつむきさうさ
同又出れめと吾事とをに傳

一 五と人のさ一指付回さつとハサ下と海一の
付さあささ大指中々卒夜海とさ裁

一 五と一指中ハハサとめさ
さす下中ハ振中不及指

一 同吾人盡とれたあゝと此は付さ下と取あ
五と裁下と吾也とさ酒と清と一同吾
めささ下と盡と取と此は上と吾事とめさ

一 一と下とさの時た光小角小振さ事ハさる
海也沙盡中さ下と取なれ末句海也

一 下等此蓋と也（此は蓋と何れ下等此の
 付るからとてきくを裁酌（液金）又
 時宜あり、取捨を以て之とて大形に
 酌（液金）の取捨人（蓋）と何れ中元とて蓋と
 取捨と等（り）ゆと清（り）取と此（り）分（り）取
 取（り）とて液取とと（り）取（り）
 一 同（り）き（り）と（り）の（り）と（り）上（り）下（り）と（り）裁（り）酌（り）

液金（り）又（り）取（り）と（り）何（り）
 一 下等此蓋と取（り）と何（り）と（り）蓋（り）と（り）清（り）と（り）方（り）と（り）蓋（り）
 取（り）と（り）下（り）と（り）蓋（り）と（り）清（り）と（り）方（り）と（り）蓋（り）
 取（り）と（り）下（り）と（り）蓋（り）と（り）清（り）と（り）方（り）と（り）蓋（り）
 一 使者（り）と（り）下（り）と（り）蓋（り）と（り）清（り）と（り）方（り）と（り）蓋（り）
 下（り）と（り）蓋（り）と（り）清（り）と（り）方（り）と（り）蓋（り）
 下（り）と（り）蓋（り）と（り）清（り）と（り）方（り）と（り）蓋（り）

白濁也

一 一人の膏と汗の時と其の膏と汗とを
汗前通て来るといふ時と實をいへば汗と
頂戴する板をいへば其時懐中に汗と
汗との也

一 一人の膏と汗とを其の膏と汗とを
汗とをいへば其の膏と汗とをいへば其の膏と汗とを

何と曰ふ也

一 膏と汗とを其の膏と汗とをいへば其の膏と汗とを
いへば其の膏と汗とをいへば其の膏と汗とをいへば
一 通りの事と約めくはとて其の膏と汗とをいへば
いへば其の膏と汗とをいへば其の膏と汗とをいへば
諸君退き消るに裁中其の汗は汗と
しとて其の汗とをいへば其の汗とをいへば其の汗とを

以酌めし中事ハ正月又ハ日新の辰に能て
ん得ん得

一 大流の事古来ハ流の上を重くし是も以
名のよりたれり其故も大と流の流
叔岩へ向あ得実流も乃載一中不可
潜よりと重くお退く

一 小流の事以重と沈み此流も重くし吾れ

流重ハお酌の際ハ流大と重たふと此意
と流重へ向あ得実流も乃載一中不可
飲よりと重くお退く其故も大と流の流
又重く指何ハ中事と流重と重くし是もお
退也

一 下流の事以重たれり重と重たの時に重
右得しと重たれり酒と流重ハ指何ハ重

澄んてとと元のお金に色は道小
お付実事を分偏てとわふ限思ひ指さ
不裁え人の御前も人小依一紙裁
年一五扱一も上紙敬たて出
不限常とてけん得る事也

一 中候とて事も人教まいつ時注やと
すけとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとて
の時とて初つとてとてとてとてとて
初つとてとてとてとてとてとてとて
つてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとて

一 大沖とてとてとてとてとてとてとて

一 物をけしむるを世に成人と称する
蓋はれし中よりけしむるは福を降るるはけ
やとて又けしむるは下輩と稱し蓋とせし
同其事とあり其時と稱す同業
一 貴人の御中けしむと振裁返し蓋し中を
單にけしむるは下輩の中へ不裁下と
不振裁なり其時と稱し又けしむるは
不振裁なり其時と稱し又けしむるは

に傳

一 中へけしむるを世に成人と稱する
蓋はれし中よりけしむるは福を降るるはけ
やとて又けしむるは下輩と稱し蓋とせし
同其事とあり其時と稱す同業
一 貴人の御中けしむと振裁返し蓋し中を
單にけしむるは下輩の中へ不裁下と
不振裁なり其時と稱し又けしむるは
不振裁なり其時と稱し又けしむるは

元の時ぬき其不盡と決まりぬ返さずして
由り盡す(返さずとす)一層ふみなり
ん得

一 中春ふ者いふ事注めると盡なりが
一 中春といふ(服う者といふ)共にか
いといふ春といふは大方者のいふは一盡
なり時ふ者いふ事注めるとす一層

ふは同也也礼酒の時を盡かて能え
一 行要也

一 盡の上より進とゆふ事おのれを
時を兼ねるおのれ進と中進同也と
大方は進といふ者より二つ目の由り
一 小春といふ事とす又ふとす
物注し納事といふは是をば不盡とす

身礼をいふ時折添細く又客人の酌をいふ
をいふ

一 同又下軍をいふは酌をいふ時と酌をいふ
時とは時を二夜加へて二夜目と添をい
ふ力加へて刀をいふは添をいふ時
裁板右の添をいふは酌をいふ時余の
若し添をいふは時添を添をいふ裁板

おまのふおまのふおまのふおまのふ
おまのふおまのふおまのふおまのふ
おまのふおまのふおまのふおまのふ
おまのふおまのふおまのふおまのふ

一 同果をいふは酌をいふ時と酌をいふ
酒を添をいふは又添をいふは酌を
事ともいふ

一 礼酒の時初め馬と進上りる時何色馬

と一 其時馬乃馬と只馬とをさるる

いふ時いふ代に

一 主人の酒の時た力を進上りる事先我酌を

とせりぬ二夜めを加ぬる中次の人當

とあふ一 御前進上る時初めと沙汰

中次方ハ中次の人初め初進上り初進上り

一 又一人の初中次の人た力を初進上り初進上り

事とさるるはさるる中次ハ其時の初進上り

振る切えのさるる初進上り初進上り又

常のさるる初進上り初進上り初進上り

初進上り初進上り初進上り初進上り

次の人初進上り初進上り初進上り初進上り

一 初進上り初進上り初進上り初進上り

侍輩と爲るに在りて也

一 父乃不意と云ふ（同宗小親之臣）但親の面
なりしと云ふ（此御宗也）不意と云ふ

一 爲帽子宗此の乃事古の（是も是也）
挽七是出所（加分）同加と二反めん
と（二反め）と云ふ（何れに宗も小同加）

一 軍陳乃の此事一脱秘事也（疎るに之実

が宛居掛く向（進）得る要（少）も退（ふ）
不（ふ）加（ふ）と云ふ（加）小（少）候（疏）之（加）分（時）
方（能）と云ふ（下）挽（と）進（る）得（る）加（ふ）
光（の）御（宗）一（反）進（ふ）之（以）後（に）膝（と）実（と）
不（若）け（時）と云ふ（此）（大）指（を）押（し）
之（事）と云ふ（此）

一 的（の）宗（と）云（ふ）事（大）小（増）之（下）（ハ）大（此）方（少）

村田小平太

寶曆十一年年

十月十日



信琴



津村少島友

上元のうへに書きたるものと
左の記のうへに書きたるものと
右の記のうへに書きたるものと
右の記のうへに書きたるものと



H+K 2

GretagMacbeth™ ColorChecker Color Rendition Chart

15.01.2002